

ジェフリー・サックス著「地球全体を幸福にする経済学 - 過密化する世界とグローバル・ゴール - 」
早川書房 2009年7月20日刊を読む

力を合わせて - 地球規模の問題解決のために -

はじめに

- (1)一人の人間として、何より大事な責任は、できるかぎり真実を知ろうと努力することである。
ここでいう真実とは、技術であり、また倫理でもある。
- (2)人間の美点とは、幅広い科学知識に加え、他者の心情を思いやれることである。貧しい人、差別された人、希望をもてない若者たち、速すぎる変化に翻弄される農村地帯の窮状などを理解できることだ。
- (3)ガンジーは自らの人生を「真実のための実験」と呼んだ。私たちの世代も、その実験を試してみるべきだろう。
- (4)真実を知ろうとしなければ、私たちの目は塞がれ、宗教や地域や国を分断させる嘘や煽動に惑わされてしまう。
- (5)科学を信頼しなければ、私たちは実体のない偽りの予言にだまされる。
- (6)自分たちとは違う社会、文化、宗教、声なき貧者の声を理解し、共感しようという断固たる決意がなければ、私たちは不信という渦巻きに呑みこまれ、あげくのはてに「敵か味方か」という憎悪の二者択一を迫られるかもしれない。
- (7)世界平和と持続可能な開発を達成するために、私たち一人ひとりができることを、以下にあげよう。全部で八つある。

1. その一、現在の課題について知ること。

- (1)持続可能な開発の基礎となる科学にくわしくなろう。
学生ならば、環境、開発経済学、気候変動、公衆衛生、その他、関連領域の授業を受けるとよい。
学生でなければ、科学の発展についていけるように努力すること。
(ア)『ネイチャー』『サイエンス』『ニューサイエンティスト』『ディスカバー』『サイエンティフィック・アメリカン』など、一流の科学雑誌は現代の必読書だ。すべての記事を理解できる人はいないだろうし、論文に出てくる専門用語に怖気づく人も多いだろうが、とにかく、

これらの雑誌は新しい発見があったことを情報として伝え、科学政策の要点についても取りあげている。

(イ)ウェブサイトにも優れたものが多く、realclimate.org(気候変動についてのサイト)などにアクセスすれば科学界の学説や進歩を追いかけられる。

2. その二、なるべく旅をすること。

(1)異なる土地や文化にじかに触れることは、共通の関心や願望をわかりあい、その土地特有の問題を理解するのに最良の手段である。

(2)ここでいう旅とは、街を歩きまわること、国内を見てまわること、そして運がよければ海外へ出かけることである。

(3) 学生にとっては、特別なチャンスになるだろう。キャリアを築くきっかけになることもあり、また一生を賭けられる情熱の対象が見つかるかもしれない。

海外で働くことは新鮮な経験になるだろう。

高校を出たあと、大学へ進む前に一年間の旅の時間をとるのもよい。

若者にとって、未知の異文化に接し、ひどい貧富の差を知ることは貴重な経験である。地球の汚染、水ストレスに苦しむ地域、気候変動の脅威を自分の目で見ることができる。

大学では学生たちに留学を勧めることも多く、身をもって外国の文化や社会を学ばせようとする。留学は人生の転機になり、人生を変えることもある。チャンスがあれば、ぜひ経験しておこう。

旅行は、外の世界に向かって開かれた窓というだけではなく、将来に通じる窓でもある。なぜなら、グローバル化が進み、新興市場の勢いが増すことによって、今後は外国との結びつきがさらに緊密になるからである。

3. その三、持続可能な開発を推し進める団体を作るか、または参加する。

(1)新設または既存の団体のなかには、さまざまな面からこの問題に取り組んで、めざましい成果を上げているものが多い。近年、アメリカの大学でも、極度の貧困、公衆衛生、環境問題などをテーマにした活動が盛んになっており、それがきっかけで生涯にわたって社会問題に関わるようになる学生も増えている。

(2)一人または団体の行動で世界が変わることもあり、それを見た周囲の人は見習おうと思うかもしれない。

ムハマド・ユヌスはグラミン銀行を創設し、世界中にマイクロクレジット革命を引き起こした。ポール・ファーマーはパートナーズ・イン・ヘルスを設立し、すべての人が医療を受けられるようにすることは可能だと世界中に示した。

ノーマン・ボーローグは小麦について研究する「国際トウモロコシ・小麦改良センター」の設立に助力し、それによって世界中の飢饉をなくすことに貢献している。

今日のニューリーダーたちは、アフリカで緑の革命を推進し、マラリアを撲滅し、乾燥地での

農業に新たな解決をもたらし、辺鄙な村でインターネットが使えるようにし、ますます世界をよくしていくにちがいない。

4．その四、地球規模の持続可能な開発に向けての活動に、自分の住む地域も加わるよう働きかけ、周囲の人びとにも参加を促すこと。

(1)2007年、バレエダンサーのジャック・ダンボワーズが主宰するナショナル・ダンス・インスティテュートは、アフリカ開発を支援する活動を開始したが、これによってニューヨークの大勢の子供たちは大事なことを学んだ。

(2)ナショナル・ダンス・インスティテュートは、おもに低所得者層が住む問題の多い地域の公立学校でダンスを教えることにより、児童の長所を伸ばし、審美眼を養い、達成感をもたせた。

(3)ナショナル・ダンス・インスティテュートが2007年のプログラムのテーマにアフリカの村のダンスと文化とリズムを選ぶと、子供たちも期待を裏切らないパフォーマンスを見せた。

(4)そのうえ、さまざまな独創的な工夫をこらして、学校と家族と近所の人びとを巻きこみ、セネガルのポトウで実施されていたミレニアム・ビレッジの支援金を集めたのだった。

5．その五、ソーシャル・ネットワーキング・サイトを介して、持続可能な開発を促すこと。

(1)これらのサイトは、社会活動を広げ、支持するための先端的なツールとして人気が高い。

(2)友人、学校、職場、ブログといった個人的なネットワークを結びつけ、別々だったコミュニティに共通の目的のもとに集うよう働きかけてみてはどうだろう。

6．その六、政治に参加しよう。

(1)国が採択したミレニアム・プロミスを尊重するよう地元の政治家に要求する。

(2)世論が高まって政府の公約を突きつければ、政治家は従わざるをえない。

(3)選挙中には、手紙を書く、事務所を訪ねる、公聴会で発言するなど、政治家に圧力をかけよう。

7．その七、職場を巻きこもう。

(1)どんな企業も地球規模の持続可能な開発に一役買うことができる。

(2)何よりもまず、個々の会社は企業としての社会的責任の基本、たとえば国連グローバル・コンパクトの条項を遵守すべきである。

(3)だが、それだけでなく、それぞれの会社は、特殊な技術、組織化されたシステム、従業員の能

力、企業としての名声などをもっており、それらをミレニアム・プロミスの実現に役立てることができる。

(4) 企業の社会責任は慈善ではなく、まっとうなビジネスをすることである。

(5) 顧客と供給者、そして何より重要なのは、従業員自身が、社会的な責任を真摯に受け止めた企業が掲げる理念のもとに団結することである。

8. その八、自分自身がミレニアム・プロミスの基準に沿って生活すること。

(1) 国境や文化の違いや階級差を乗り越えてわかりあえる共通点を見出し、私たちの世代に共通する関心事をおたがいに理解しあうことが大事だ。時間と金とエネルギーを費やして、社会的なネットワークを充実させること。

(2) 友人や同僚たちの先頭に立って行動すること。

(3) 消費者として恥ずかしくない行動をとり、地球にとって持続可能な製品や技術を選ぶこと。

(4) 市民としての誇りをもち、政治家に向かってミレニアム・プロミスは私たち一人ひとりの約束だと明言し、選挙で選ばれた政治家はそれを守る義務があるのだと伝えよう。

おわりに

(1) 私たちの世代は、環境、人口、貧困、国際政治など、多くの問題に直面しているが、見方を変えれば、それはわくわくするような、またとないチャンスでもある。

(2) 就任演説に立ったジョン・ケネディは、国民を励ますように、こう語った。

自由が最大の危機にさらされているときに(ここでは冷戦を指している)「われわれの誰かが自分の立場を、ほかの人やほかの世代と交換しようとするなどとは、私は信じない」。

(3) この言葉はいまの世界にも通用する。極度の貧困に終止符を打ち、気候変動を最小限に留めるよう方向転換し、他の生物種を大量に絶滅させるような愚行をやめさせるのは、この私たちである。

(4) 経済的な繁栄と環境の持続可能性を両立させるという難問に臆せず取り組み、それを解決するのは私たちである。

(5) 科学と国際協力という新しい倫理を力にして、来るべき世代に健やかな地球を受け継がせるのは、この私たちなのだ。

[コメント]

私は、1999年にハーバード大学行政大学院、いわゆるケネディ・スクールの一単位であった国際開発研究所で行われた公共部門の民営化短期集中コース(3週間)に参加した際、所長であったジェフリー・サックス教授から、国の発展つまり貧困の撲滅のためには透明性の高い利害関係者への説明責任を果たしながらの、また、腐敗のないプロセスでの民営化の重要性を認識させられた。

本書は、地球の未来に向けての素晴らしいテキストである。大人だけでなく、すべての高校生・大学生が手に取り熟読すべきテキストと確信する。

本書と前著「貧困の終焉(The End of Poverty)」を併せ読み、現代社会での生き方を考えたいと思う。

- 2009年8月22日林明夫記 -